



剣道の黒船－韓国

－剣道の国際普及とオリンピック問題－

アレック・ベネット

国際日本文化研究センター

始めに

武道は、日本が世界のスポーツ文化にもたらした最大の貢献のひとつである。また私は、武道こそ海外で最も成功した日本文化であると考えている。世界中のどこでも—日本からいかに遠く離れた国であろうと、またいかに辺鄙な土地であろうと—ある程度の規模のコミュニティがあれば、そこには大抵何らかの「dojo」がある。そこでは裸足に道衣という私たちの現地人たちが、日本語の指示に日本式の礼でこたえながら稽古に励んでいる。また大抵の場合、施設内には、日本の国旗や著名な日本人武道家・武術家の写真が、目立つ場所に掲げられているものだ。しかし面白いことに、その門下生たちは、日本を訪れたこともなければ日本人と接したこともほとんどない、という場合も多い。外国人が武道に入門する理由やきっかけには、次のようなものが考えられる。

1. 文化として（日系人および日本人移民の多くが、祖国の伝統とのつながりを武道に求める。また非日本人が、日本人留学生や会社員に勧められて、または元々日本文化に対して抱いていた興味から自発的に始める、という場合も多い。）2. 格闘技術として（格闘術または護身術として、軍隊や警察における訓練の一環として、など。）3. 健康法として。4. 精神修養のために（自信をつけたい、自己規律を身につけたい、といった動機からの入門。こうした理由から自分の子供に武道・武術を習わせる親も多い。）5. 競技スポーツとして。6. 精神的成長や覚醒につながるプロセスとして（武道・武術の、しばしば「神秘的」と言われる精神的側面に惹かれる者も多い。）7. 戦略として（今では主流とは言いがたいが、日本のバブル景気時代には、日本の経済的・経営的成功は「サムライ的な戦略」を特徴とする経営手法にある、とする見方が強く、多数ではないにせよ、それに触発されて武道・武術に入門する経営者もいた。）8. 第二次世界大戦中とそれ以前、日本の政府または軍隊に強制されて（これについては日本の植民地支配下にあった朝鮮と台湾の人々が主だが、ごく稀ながら、戦争捕虜が日本人の看守や兵士の練習台になりながら覚えたというケースもある。実際、欧米には、柔術をそのようにして学んだという者によって設立された柔術教室が、少数ながら存在する。）

しかし最近、武道の国際普及に関して、まったく新しい傾向が見られるようになった。韓国武道の台頭である。世界各地で、「dojo」ならぬ「dojang」の開設が相次いでいるのだ。

「dojang」はもちろん、「道場」の韓国語読みをアルファベット表記したものである。韓国武道は、上に示したのと同様の特徴を活かしながら、日本武道にとって代わる勢いで、国外の愛好家を増やしている。特に韓国系移民の多い地域では、「judo」ならぬ「yudo」の道場が続々と開かれ、またテコンドーが、オリンピック種目という強みも活かしつつ、空手に代わる護身術として人気を集めている。また、合気道の代わりに「hapkido」の愛好者が増えている。そしてごく最近では、剣道に対するコムドの台頭が目立つ。今のところ、新規入門者の中心は韓国系移民の子供たちだが、このままコムド人口が増え続ければ、やがて世界における剣道の姿が一変してしまうことも考えられる。そうになると、日本国内の剣道界も様々な面での影響を免れ得ないだろう。

海外における武道の段階的「韓国化」とでも呼ぶべきこの興味深い現象は、韓国人の手による韓国武道の国際化に他ならない。韓国人は、自国の武道文化の普及を積極的に、時に国家主義的な側面を打ち出しながら推進している。その戦略は極めて商業的な形をとることも多く、例えば他の道場との業務提携はもちろんのこと、門下生や指導者に対する特

典の提供といったことも行われている。

以上のことが、日本の武道に一体どのような影響を及ぼしうるのか。本論では、剣道を例に考えてみたい。剣道に対するコムドの台頭は、日本において最近特に注目を集めることとなった。現在に至るまで、世界の剣道界は、日本に拠点を置く国際剣道連盟（IKF）が取り仕切ってきたが、最近韓国で、IKFとは相反する方針を掲げた世界コムド（剣道）協会（WKA）なる組織が発足したからである。特に、剣道/コムドのオリンピック競技化というWKAの目標は、日本の剣道関係者から強い反発を招いている。しかしながら、剣道専門誌その問題を主張しているにもかかわらず、私の調査結果によると、まださほど心配することではないと強調したい。だが、WKA結成がもたらしたのは、「強い剣道」（競技剣道）対「正しい剣道」（伝統的な修行法としての文化）の討論に再び火をつけた。オリンピック競技化はスポーツ世界の頂点であるが、日本を中心とする多くの剣道家にとっては、引き付けるものがない。だが、日本における剣道の現状を考えると、解決に全力を尽くすべく理想上の矛盾と不調和が少なくない。このように、韓国で発生した剣道のオリンピックイニシアチブはある意味の「黒船」であり、21世紀の人間にとって剣道はどういう意味を持つか、真剣に反省し考え直す刺激になると考えている。

剣道（けんどう）か剣道（コムド）か？

多くの韓国人は、1910年から第二次世界大戦終戦まで及んだ大日本帝国による残酷な植民地時代を忘れてはいない。日本化という過程において、韓国独自の文化の多くを失い、日本領土として全面的に日本文化思想を重んじることを強制された。一方日本では、軍国主義的なファシスト政権下で、武道は学校教育に必修科目として取り入れられ¹、愛国心や戦闘心や日本の優れた武士文化と、昭和時代に新しく位置付けされた「武士道観」を基礎とした倫理観に誇りを持たせるために利用された²。

日本の領土として、台湾や韓国でも同様に武道教育が“奨励”された³。韓国人は特に武道に励み、終戦後現代に至るまで剣道には予想外に熱心さを見せた。それは多数の愛好者や比較的高度な技術を見たら分かることである⁴。しかしながら、植民地時代に彼らが受けた深い傷は癒えることがなく、韓国全域に及ぶ修正主義派の間で、剣道などは決して日本の伝統文化ではなく、もともと韓国の伝統文化であると強調する人は少なくない⁵。

例えば、このような修正主義的な主張は、国際剣道連盟の加盟団体である大韓剣道会の公式ホームページに見られる。

「我が国の剣術は長い歴史と伝統を持っている。高句麗時代には早衣仙人が剣術やその他の武術を成熟させ、百済でも刀剣を専門とする部署を置いて刀を製作した。また、兵法者（=剣術師範）が日本に渡っていったという記録がある。しかし、剣術が大きく発展したのは新羅であった。新羅の花郎制度が確立されたことによって、我が国は剣術の最盛期を迎えたのである。その代表的なものが、まさに現存する世界最古の剣法譜である「本国剣法」だ。本国剣法は現代剣道で最もたくさん使用する双手執柄剣法の基礎にもなった。

新羅で大きく起こった剣術は高麗時代まで影響を及ぼして発展して伝わった後、朝鮮朝に至って崇文賤武思想が広まりながら衰退期を迎えるようになった。反面、我が国から剣術文化を受け入れた日本はその間これを継承、発展させて、剣の文化を开花させていったのである。」⁶

1 今村嘉雄[ほか]編『日本武道大系』同朋舎出版 1982年 pp. 100-111

2 入江克己『日本ファシズム下の体育思想』不昧堂出版 1986年を参照のこと。

3 Thomas A. Green (ed.), 『Martial Arts of the World』ABC-CLIO 2001年 pp.295, 597

4 大韓剣道会の会員数はおよそ400,000人。全日本剣道連盟は1,288,000人の会員が登録している（2002年国際剣道連盟加盟団体資料）

5 発音は違うが、漢字“剣道”は同じ。

6 <http://members.at.infoseek.co.jp/koreawatcher/docs/kkahistory.htm> を参照のこと。

さらに、「朝鮮朝中期まで卑しまれてきた剣術は、壬辰倭乱と丙子胡乱を経験しながら、その重要性を再び認識された。正祖時代に編纂した『武芸図譜通志』の二十四班武芸のうちに本国剣が含まれていて、軍事訓練科目として採択されたことがこれを証明している。」と述べている。

その後、1896年に警務庁で警察教育の一科目として撃剣(=剣術)が選択され、1904年に陸軍研成学校でも撃剣を取り入れた。また、1908年には韓国と日本の間で最初に警察官撃剣大会が開かれた。韓日間で剣術が交流していることが分かる。同じ年の9月、武徒体育部という団体が生まれて一般国民を対象に最初の社会体育を試みた。ここでも撃剣が一種目として取り上げられた。

この時は既に撃剣の装備及び練武方式が、現代剣道と類似するように開発されていた。1910年頃、撃剣という用語は「剣道」(コムド)という新しい用語に変わったとかれているが、日本では「剣道」になったのは1919年8月1日と記録されている⁷。戦闘用から武道性の強いスポーツに変わって行き始めたのである。この時から剣道は大衆的に広く知られるようになった。また、1906年には私立学校などで剣道教育が始まり、1927年に必修科目になった(日本は1931だった)⁸。それ以降の歴史を以下の表にまとめてみた。

1935	第16回全朝鮮体育大会(現在の全国体育大会の前身)から、剣道が正式種目に採択されるに至った
1938	日帝の強圧により、朝鮮体育会は解散された
1945	光復とともに剣道は再び活気を取り戻した
1947	ソウル市警察官剣道大会を出発として、剣道は、より組織的な発展を試みるに至った
1948	全国100余名の師範級剣道家たちが昌徳宮に集まって「大韓剣士会」を結成したのである(現在の大韓剣道会の母体だ)
1950	第1回全国警察官剣道大会が開催された
1952	大韓剣道会を創立するための準備委員会を発足させ
1953	「大韓剣道会」が創立、発足して大韓体育会の加盟団体になった 第1回全国個人剣道選手権大会も開催した (*全日本剣道連盟の結成年と同様)
1956	20年ぶりに再び剣道が全国体育大会に正式種目として採択された
1959	会長杯 段別選手権大会と全国学生剣道大会が始まって、剣道が全国的に広がったことを立証した
1964	学生剣道連盟が大韓剣道会の傘下団体として加盟し
1970	学生連盟が大学連盟と中高連盟に分離された 国際剣道連盟が創立され、大韓剣道会は副会長国として加盟した
1972	少年体育大会に剣道競技が正式種目として採択された
1979	東亜日報社と大韓剣道会が共同主催して大統領杯 一般選手権大会を開催し
1988	韓国社会人剣道連盟が発足しながら、第1回韓国社会人剣道大会が蔚山で開かれた
1993	SBS全国剣道王大会が誕生した

この表によると、確かに韓国は長い剣法の歴史を誇ることは間違い。しかし、大韓剣道会の役員には、現代剣道は日本によって形成されたことは認める人はいるが、彼らはまたこうも言っている。「ただ、この剣道をさらに発展させ、また理論的な面や競技力の面で日本を凌駕する実力を備えて行くことが、我々のなすべきことだと思います。それが真の宗

7 『大日本武徳開沿革 玄』、『会報』第二四号 1919年8月 pp. 101-103

8 『剣道の歴史』全日本剣道連盟 2003年 pp. 605-607

主国の地位を取り戻すことだと思います。」⁹ 日本の剣道家にとって、ばかげた発言とも取れるが、果たして、本当にばかげているだろうか？

宗主国論争までに及んでいるが、表面上の違いを除いては、韓国のコムドと日本のケンドウは基本的に同じものである。いくつか表面上の違いを挙げてみる。韓国では用語はすべて韓国語を使い、審判旗は日本の赤白ではなく青と白、蹲踞や日本では重んじられている礼儀作法を省略している。また、多くの韓国人剣士はマジックテープで留める腰板のない袴を穿くようになっている。この方が実用的だと主張しているのだが、明らかに日本の習慣をそのままでは受け入れないという態度に見える¹⁰。しかし、このような違いを除けば、素人が見れば相違にはほとんど気づかないであろう。

コムドもケンドウも竹またはカーボンでできた竹刀 (*jukdo*) を使い、決められた打突部位を狙う：面 (*mori*)、胴 (*gap*)、小手 (*ho-wan*) 突き (*mok*)。防具 (*hogoo*) は全く同じである。打突時には、踏み込み足を用い、打突と同時に互いの体がぶつかり合い、気合を発するにいたるまで同じである。また、どちらも競技的な面は重要で、様々なレベルで大会が盛んに行われているし、精神的部分 (稽古前後の黙想、礼法、禅的な「無心」思想、人間形成の道) も保有している。

実は、世界中でコムドとケンドウは共存し、以上述べた細かい相違にもかかわらず、ほとんどの剣士は同じことをやっていると認識している。互いの稽古に参加し、同じ大会にも出場する。また、最近における韓国の日本文化解禁で、韓国の若者の間に日本文化が流行し、若い韓国剣士たちは自分たちがやっているコムドは実は日本で作り上げられたものであるとして、韓国が宗主国であるという年配剣士の主張をひそかに疑問視するようになっている。コムド (ケンドウ) の日本伝統文化説や日本宗主国説は多くの年配剣士にとって、我慢ならないものであるのは言うまでもない。

組織過多

最近の剣道専門誌が、韓国での剣道連盟の発展について取り上げた。特に、2001年9月、国際剣道連盟のライバル組織として韓国で結成された世界剣道協会と剣道のオリンピック化の関連性が大きな反響を呼んでいる¹¹。この関連性については、2000年に米国のサンタ・クララと2003グラスゴーで行われた剣道世界大会で話題になった。この新しい剣道組織の目的は、なるべく数多くの加盟団体を獲得し、オリンピックへの参加が主な目的であると明言している。

韓国で存在するおよそ80団体の中から13団体が合併した背景には、それらの母体である韓国剣道連盟 (KKF) の存在がある。世界剣道協会の事情に触れる前に、韓国に多数ある剣道団体を説明する必要がある。

まず、国際剣道連盟 (IKF) は、1970年に17ヶ国・地域によって東京で結成された。その目的は剣道 (居合道・杖道も含め) の国際普及を通じて、親善関係を養うことにあった。国際剣道連盟は3年毎に行われる世界大会、国際講習会の開催、各国の剣道連盟発足の援助や情報交換の責任を担っている。

国際剣道連盟の韓国代表は大韓剣道会 (KKA) であり、韓国剣道連盟 (KKF) ではない。その二つは全く別の組織である。他に有力な組織として世界海東剣道連盟 (WHKF) も存在する。しかし、これは剣道というより、刀を使って型をする居合道のような武道普及に努めている。WHKFに10万人の会員がいるといわれ、KKAにとっては軽視できない存

⁹ ソ・ビョンユン (大韓剣道会専務理事) 「コムド (kumdo) とケンドー (kendo) についての多くの質問に対して...」

<http://members.at.infoseek.co.jp/koreawatcher/docs/kumdownakendo.htm>

¹⁰ シン・スンホ (大学剣道連盟競技理事) 「今の世代の剣道家は剣道が成熟するための礎石になるべき...」 <http://members.at.infoseek.co.jp/koreawatcher/docs/community35.htm>

¹¹ 例えば、「韓国で世界剣道連盟設立」『月刊剣道日本』2002年4月号 pp. 86-95, また「特集—日本から世界へ」『月刊剣道日本』2003年11月 pp. 46-58を参照のこと。

在である。もちろん数多くの強力な連盟が活躍していることによって、ライバル意識による摩擦が起こり、互いの活動を妨げることは少なくないが、韓国政府は、剣道をレクリエーション以外のものではないと判断し、問題解決に手は貸してくれない¹²。

KKA は、多数の連盟の中でも卓越しているという立場を維持するため、真の剣道は WHKF が促進するようなものとは違い、防具と竹刀を使用することなどを、出版物などを通じて積極的に宣伝活動をしている。また、各連盟の中にも派閥があり、それは韓国国内だけではなく、海外にも及び、正確な情報は非常に把握しにくい状況である。

勿論、日本でも全日本剣道連盟と張り合う組織も存在するが、規模が小さい。例えば、大日本武徳会、日本剣道協会、また武道館の中で稽古をされている一剣会羽賀道場もある。それぞれ全日本剣道連盟が普及している剣道と思想も形も違う。居合道にもいくつかの連盟が存在するが、以上の組織は全日本剣道連盟に比較すれば、小さくほとんど目立たない存在である。全日本剣道連盟は、他の連盟の段位や資格を獲得することを禁じることによって、有力なライバル出現を抑えているのである¹³。

しかも、全日本剣道連盟は日本体育協会と日本オリンピック委員会（JOC）に加盟している唯一の剣道団体である。しかし、オリンピック種目ではないため、JOC では最低の D ランクに位置づけされている。しかし、全日本剣道連盟は日本における剣道を代表する団体として公式に認められている¹⁴。日本人の剣道家は、全日本剣道選手権大会や国民体育大会や国際剣道連盟主催の世界選手権大会の出場権を得るために、全日本剣道連盟の会員でなければならないのである。

韓国で全日本剣道連盟に相当する組織は、唯一政府機関から承認を受けている大韓剣道会であり、試合や行事に参加するためには、正式会員でなければならない。政府機関から承認を得ているということは、様々な利得がある。例えば、試合結果による進学。一流選手は公務員の身分を持って市などにプロの指導者として採用される。KKA に入っていない他連盟の会員たちは同じような機会は与えられていない。しかし、その不平等な扱い方の背景が分からない人が多く、KKA はたびたび批判的になる¹⁵。

オリンピックの提案

韓国の剣道専門誌である『剣道世界』には、世界剣道協会の設立式を大きく取り上げ、中心人物へのインタビュー、組織の目的などを紹介した。次のような事が記載されている。

「(財) 韓国剣道連盟 (KKF) は 10 月 27 日 (中略) 世界剣道連盟創設式を開いた。この創設式は、韓国でテコンドー一つで人気のある剣道の世界化のため、テコンドーに習って、国内 80 余の剣道団体中、13 の門派が統合結束した。

既存の大韓体育会加盟団体である、(財) 大韓剣道会は、日本が宗主国という点と、日本人のために構成された国際剣道連盟 (IKF) の活動が、日本剣道の普及のための活動ではないと批判されている。今までコムドは、アジア大会やオリンピックでの種目獲得をしなかった。その間国内で韓国型剣道を守り通した韓国剣道連盟がテコンドーに次ぐ、第二のオリンピック種目化と国際化を発表したことは注目に値する。」¹⁶

この事態は日本に影響を及ぼすのか。現在のところ、剣道を代表する国際組織は国際剣道連盟である。しかし、それを承認しているのは、国際剣道連盟自身である。今までは、

¹² 「韓国で世界剣道連盟設立」『月刊剣道日本』2002年4月号 p. 86

¹³ 全日本剣道連盟は1,288,000人の剣道会員と72,000人の居合道会員が登録しているので、人数的にはるかに世界一である。(2002年国際剣道連盟加盟団体資料)

¹⁴ 「特集—日本から世界へ」『月刊剣道日本』2003年11月 pp. 46-47

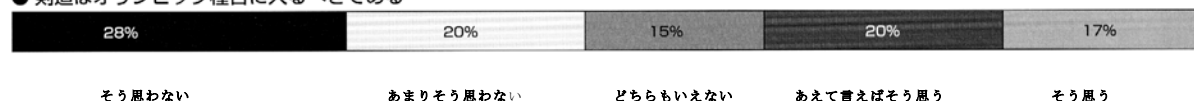
¹⁵ ソ・ビョンユン 前掲書

¹⁶ 「韓国で世界剣道連盟設立」『月刊剣道日本』2002年4月号 p. 88

IKFは、オリンピックに対してほとんど関心を示していないが、理事の中では、オリンピックを目指すべきだと主張する人もいる。例えば、筆者が出演していた2000年サンタ・クララで開催された剣道世界選手権大会の閉会式において、台湾理事の挨拶で、「素晴らしい剣道ができる限り、あらゆる所に普及するためにも、剣道のオリンピック化は必要だ」と強調した。しかしながら、IKFの役員、また世界各国の日本風剣道愛好家の多くは、一般的にオリンピック化を避けるべきだという考えだ。

これを証明するために、英語の剣道専門誌である『剣道・ワールド』はインターネットを通じて調査を行った。得られた回答数は36カ国から264人に昇った。多くの回答者は剣道のオリンピック参加反対だと指摘したが、およそ30%は賛成の意見を述べた¹⁷。

● 剣道はオリンピック種目に入るべきである



韓国では、KKAはWKAの^{どうこう}動向を気にしているようだが、同時に剣道をオリンピック化すべきだと主張する人は少なくない。実は、大韓剣道会専務理事であるソ・ビョンユンは「日本以外の国では、オリンピックに入らなければ、その種目自体が大きくなるのが難しいのです。剣道の優れた点をアピールして発展させ、世界人のための剣道であるべきです。韓国、台湾辺りはある程度国の理解はありますが、それでも発展は苦しい。その他は国の代表、と言うより`クラブ`と言ったほうがいいのではないのでしょうか。」¹⁸

このように、多くの人々が正式なオリンピック種目になることを反対しているにもかかわらず、IOC傘下にあるGAISF（国際スポーツ連盟連合）を通じてのIOC加盟は（正式種目化の目的でなくとも）、世界各国にある多くの小さい剣道連盟にとっては、大変魅力的な選択である。それは、資金提供を得るために大いに有利であるからだ。以下の調査結果で分かるように、正式にIOCと関わることによって、経済的な利点が大きく、それは自国の剣道普及に繋がると推測する外国人剣士は少なくない¹⁹。オリンピック化は財政上好ましいことかどうかに対しては、



この数字で分かるように、IOCに関わるのが財政上、有利であると多くの回答者は考える。このことは2003年7月に行われた国際剣道連盟の会議で、特にヨーロッパの剣道団

¹⁷ Alexander Bennett, Hamish Robison, "Survey: Kendo and the Olympics", *Kendo World* (Vol. 1 No.1), KW Publications, 2001 - We conducted a survey through the internet to ascertain the attitudes of international *kendoka* towards the introduction of *kendo* into the world's most prestigious sports tournament. In summary, our survey presents the opinions of 264 English speaking practitioners of either *kendo* or *kumdo* from 36 countries, of all experience levels, and of all rankings. We can justly assume that the results of the survey provide a reasonable and fair assessment of their opinions and experiences as related to *kendo* and the Olympics. We can also assume that this un-weighted self-selected sample provides a fair approximation of a random un-weighted sample survey of 264 respondents providing a precision level of 6% 95 times out of 100.

¹⁸ 「韓国で世界剣道連盟設立」『月刊剣道日本』2002年4月号 p. 89

¹⁹ Bennett, Robison 前掲書

体によって取り上げた課題である。GAISFの加盟団体になることによって、その国での剣道のステータスも上がり、政府などから資金援助を得やすくなるのが一番の魅力である。このような資金援助がない限り、その国での剣道普及活動は限られてくる²⁰。勿論、日本の場合は、剣道は日本の伝統文化として、愛好家以外の人も認めているし、日本では普及や連盟の生存は、海外の連盟が直面している問題ほど深刻ではないと言っても良い。

オリンピック・ファミリーへの導入過程

剣道界という穏やかな池に現れたこのオリンピックのさざ波は、日本、また全世界の剣道界に大きな影響と大損害を及ぼす津波になる可能性がある。また、宗主国問題をはじめ、この問題は、日本・韓国間の友好的とはいえない関係によって激化されるかもしれない。どちらも剣道を自分の国の伝統文化であると主張するし、その文化を世界に普及し国際的に認められていることに満足とプライドを感じている。ほとんどの外国剣士は、剣道の宗主国は日本だと意識し、それをあまり問題にしていなが、コムドの道場が少しずつ増えるにつれ、海外でさえ日本側か韓国側かの選択を強いられることは間違いないし、すでに、そのような状態にあるところも存在する。

とにかく、オリンピックに関するこの事態は剣道界を不安にさせていることは事実である。繰り返しになるが、WKAは2001年10月にIKFのライバル剣道普及団体として設立した。WKAは国際規模でクラブ・連盟の加盟を募集している。WKAは政治色が強く野心的で、オリンピック化が最終目的であると公言している。それにも増して、テコンドーのようにオリンピック種目になるために、全力を尽くし、必要であれば今の剣道の形を変えるという意思もはっきりと示した。

最初に達成しなければならないのは、先に述べたIOCの認定国際連盟であるGAISF（国際スポーツ連盟連合）のような組織へ、IF（国際連盟）として加盟しなければならない。GAISFとは、各競技連盟や協会を、世界的スポーツ保護、情報交換、世界的な大会の協議規定や運営などを目的に、1967年に創立された。GAISF以外のIOC認定国際連盟には、ASOIF（夏季オリンピック国際競技連盟連合）、AIWF（国際冬季スポーツ連盟連合）、ARISF（IOC公認国際スポーツ連盟連合）などがあり、それら団体も、加盟団体（IF）の援助を行う。IFであるからと言って、そのスポーツは自動的に正式なオリンピック種目になると限らない。しかし、いわゆるオリンピック・ファミリーの一員とみなされる。すなわち、その加盟団体はその競技において、公式（IOC認定）のInternational Federationとして認められる訳である。よって、その気があれば、正式なオリンピック種目になるための手続きができる権利を有する。すでに柔道、合気道、空手道、柔術、テコンドー、レスリング、フェンシング、サンボ、そして2008年北京オリンピックでデモンストレーション・スポーツとして初舞台を踏むウーシュー（武術太極拳）という武道競技団体がGAISFに加盟している。

WKAのオリンピックへの想いは実現するのか。私の調査によると、WKAには政治力のある役員がいるにも拘らず、GAISFの加盟団体になるための会員数は全く不十分である。GAISFのIFになるためには、綿密な調査を受け、数多くの会議で承認を得て、徐々に加盟国としての承認がおりると長いプロセスを通らなければならない。過去、スポーツ界において韓国は、政治的圧力と公正な決定を得るノウハウを用いている。例えば、国際柔道連盟の会長は韓国人であるし、2002年FIFAワールド・カップも日本との共催を果たしている。WKAが誇る強みは、テコンドーのオリンピック化成功に携^{たずさ}わっていた人物との関わりである。得に、最近IOC副会長に返り咲き、GAISF会長に9回も選出され、また世界テコンドー連盟（WTF）会長でもあるDr. Un Yong Kim（金雲龍）の存在は重大であろう²¹。ついでながら、WKAの会長は、1970年に国際剣道連盟を結成した中心人物の一人として

²⁰ 阿部哲史「欧州から見た剣道の国際化」『月刊剣道日本』2003年11月号 p. 53

²¹ http://www.olympic.org/uk/organisation/ioc/members/bio_uk.asp?id=33を参照のこと

副会長を務めた Jung Hak Seo 氏（徐廷學）である。よって、このような影響力を及ぼす人物が WKA に関係していることを考えると、けっして軽視すべき組織ではないであろう²²。

しかしながら、オリンピック憲章で明確に書いているように、オリンピック競技大会のプログラムに含まれるためには、オリンピック競技は下記の基準を満たさなくてはならない。

「1. 1. 1 オリンピアード競技大会のプログラムに含めることができるのは、男性においては、4 大陸で少なくとも 75 か国、女性においては、3 大陸で少なくとも 40 か国で行われている競技のみとする。」²³

しかし、WKA はこのような数字を満たすのはおそらく遠い未来のことであろう。2003 年の 11 月の時点で、WKA はおよそ 30 加盟団体があると公開しているが、その中で確認が取れたのは韓国、米国（WKA の本部地）、台湾、カナダ、ロシア、とイギリスだけである。しかも、会員の具体的な数字を把握するのは、今の時点ではほぼ不可能である。しかし、すでに 44 ヶ国（2 地域）（日本を除き 420,404 人の会員）の加盟団体と 38 ヶ国の加盟を求める団体（817 人の会員）を誇る国際剣道連盟に比較すると、WKA はまったく競争相手にならないと言ってもいいだろう。²⁴

だから、WKF がオリンピック種目になる可能性はさておき、GAISF の加盟団体になることだけでも、かなり優れた政略とでっ上げの会員数が必要となるだろう。万一にも、WKA があらゆる方法手段で GAISF 加盟に成功したら、IKF より会員数をはるかに少なくても、剣道を代表する組織として IOC に認められる。もしもオリンピック種目になるために剣道の形や規定などを変えようとするれば、もちろんその権利はある。この場合、新しいハイブリッド剣道の成長は、もはや国際剣道連盟には止めることはできないだろう。

前述した政治的背景により、WKA を作った 13 組織は同じ形の剣道をしていることは考えにくい。また、WKA の役員はすべて剣道をしているのではなく、その多くはテコンドローの専門家である²⁵。この事実から考えると、WKA は一体どのような剣道を世界中に普及しようとしているのか疑問である。ひとつの提案として、ルールを分かりやすくするために、西洋フェンシングのように、防具の電氣化も考えているという報告もあった。

「電子防具を着用し、判定の電子化を導入します。また蹴り技も点数になり、自動点数制を導入することによって、連打の有効性を積極的に取り入れます。見る面白さを出すため、競技スタイルも研究します。」²⁶

いわゆる「伝統的」な剣道の愛好家にとっては、剣道を IOC の基準に合わせることは、もっとも望ましくない行為である。例えば、正確な判定を下すために、フェンシングのような電子防具を利用することは、剣道の大切な要素に背くことになるだろう。剣道の場合、有効打突とは、気剣体一致など、様々な厳しい（不明瞭とも言える）条件を満たしていないといけない。剣道をしていない者にとっては、「一本」の判定は非常に分かりにくいことが多い。

剣道の有効打突は「充実した氣勢、適正な姿勢を持って、竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるものをいう」²⁷

²² 徐廷學

²³ <http://www.joc.or.jp/olympic/charter/pdf/olympiccharter2002.pdf> を参照のこと。

²⁴ 国際剣道連盟資料（2002 年 3 月）

²⁵ ソ・ビョンユン 前掲書

²⁶ 「韓国で世界剣道連盟設立」『月刊剣道日本』2002 年 4 月号 p. 88

²⁷ *The Regulations of Kendo Shiai- The Subsidiary Rules of Kendo Shiai and Shinpan*, (Revised March 23, 2003), International Kendo Federation

フェンシングの有効なポイントは次のようである。

「エペの場合、的は服と道具も含む相手の全身である。よって、剣先が体のどの部分と接触しても（胴、手足、頭）、また服と道具でも有効なタッチとして認められる。（中略）。タッチ（一本）の有効の判定は、必ず電気記録機会の示度に従わなければならない。もし、タッチが電気記録機会に明確に示していない場合は、審判員は絶対に有効だと宣言できない。」²⁸

現在の剣道の有効打突の規定によると、竹刀が体を触るだけでは一本にはならない。もし、竹刀の打突部が的である打突部位を正確に当たっているように見えても、ほかの条件を満たしていないということで、「一本」として認めないことが多々ある。このようなことは、剣道をしていない観客にとって、困惑させる原因となる。（剣道の経験者でも分からない場合が多い。）

オリンピック種目の大切な要素として、その競技に経験を持っていない観客にも判りやすいという事が挙げられる。もし剣道が正式なオリンピック種目を目指すのであれば、まず競技規定や有効な「一本」をもっと明瞭かつ分かりやすくする必要が出てくるだろう。それゆえに、WKAの防具電子化提案は、表面的にだけではあるが、剣道の「分かりやすさ問題」の解決につながるであろう。しかし、このような解決法には、当代の剣道家は納得しないだろう。「気剣体一致」で正しい「間合」から竹刀の「打突部」で相手の「打突部位」を正確に正しい「刃筋」で「冴」を持って打つこと、打った後の「残心」等々は、剣道の真髄であって、素人が理解できなくても、無条件に守らなければならない特徴である。したがって、現時の剣道は、形を変えない限り、オリンピック種目になることはほぼ有り得ない。

推測になるが、以上の問題点を防具の電子化などで乗り越えオリンピック種目になったとすれば、剣道はどうなるだろう。まず、新しく剣道を始める人はオリンピックバージョンに惹かれるであろう。オリンピックは世界でもっとも名声のあるスポーツイベントである。オリンピック大会で成功したあらゆる競技選手は、金が十分与えられている。柔道の例を挙げると、オリンピック種目になってから、尊敬の念、謙虚な態度、礼儀正しさなど、武道の美德として考えられている要素が、消えつつある。そのことに嘆く柔道家は少なくない。すなわち、人格形成より、メダルを獲得することが選手の唯一の目標になった²⁹。このような考え方は「武道精神」に反するだけでなく、オリンピックの本来の思想にも反するはずだ。

「根本原則：近代オリンピズムの生みの親はピエール・ド・クーベルタンであり、1894年6月にその主導により、パリ国際アスレチック・コンGRESSが開催された。国際オリンピック委員会（IOC）が設立されたのは1894年6月23日であった。オリンピズムは、肉体と意志と知性の資質を高揚させ、均衡のとれた全人のなかにこれを結合させることを目指す人生哲学である。文化や教育とスポーツを一体にするオリンピズムが求めるのは、努力のうちに見出される喜び、よい手本となる教育的価値、普遍的・基本的・倫理的諸原則の尊重などをもとにした生き方の創造である。」³⁰

しかし、この原則にもかかわらず、現在のオリンピック・ファミリーはオリンピック産業にその姿を変え、総収益、何十億ドルのためにスポーツを利用しているという批判もたびたび聞く。これは悪いことだろうか。人間はドラマを求め、オリンピックという劇

²⁸ Fencing Rules 2000 Edition, United States Fencing Association, <http://www.usfencing.org/Forms/Rules99.pdf>, p. 27

²⁹ 例えば、D.Matsumoto「柔道におけるリーダーシップと科学の重要性ーカラー柔道着の問題」『武道学研究 29巻、日本武道館 1997年 pp. 44-63

³⁰ http://www.joc.or.jp/olympic/charter/pdf/olympic_charter2001.pdf

的な競技舞台は十分このニーズを満たしてくれる。世界の人々に喜びを与える、命を懸けて必死にトレーニングに取り組んでいるアスリートたちは、なぜ儲けてはいけないのか。また、その資金を与えるスポンサーも利益を取ってはいけないのか。近年スキャンダルに巻き込まれているオリンピック・ムーヴメントは、時代遅れをしていない、いや、時代を造っていることを考えると、オリンピックのすごさを認めざるを得ない。

しかしながら、オリンピックの倫理上の問題は別にして、剣道はオリンピック種目になることから何をj得るであろうか？ それも推測するしかないが、各国剣道連盟の自己掲示、収入増加、名声を上げることはできる。しかし、「伝統的な」理想の重要性が衰え、勝つことが全てになってしまう危険性があると考えられている。首のまわりにオリンピックのメダルをぶら下げ、企業スポンサーから大金をもらってれば、その選手の人格はどうであろうかなど、だれも気にしないであろう。具体的にどのような運命を待っているか分からないが、剣道界が目的と大切にすべき理想を再考する時期が来たことは明らかである。

IKFは、「剣道（居合道及び杖道を含む）の国際的普及振興をはかり、あわせて剣道を通じ加盟団体相互の信頼と友情を培う」であると主張している。もしその目的の成功を望むなら、先にGAISFの加盟団体になることが好ましいのではないか。そうすることによって、IKFの組織自体の運命と剣道の運命を決定する権限を持つことができ、少なくとも剣道のハイブリッドバージョンがその特典を奪うことが不可能になる。

以上述べたように、剣道がWKA が切望するようにオリンピックのスポーツになったら、多く要素が変えられることになるだろう。このようなことが起こると、剣道の本質は失われるだろうという不安はある。このパラノイアの源は、オリンピック種目になった柔道から生じたものだ。講道館柔道の創立者である嘉納治五郎の思想、たくましい肉体と精神と社会性を養うことよりも、金メダルを勝ち取ることが主な目的になっていることは、多くの柔道伝統主義者が軽蔑しているところだ。

ドーピング問題、捕獲賞金、勝つことにこだわった選手による不正行為（例えば、怪しい柔道着）、「柔道らしい」技より荒々しい力を有利にするポイント制、武道の普遍的な価値観と考えられる感情コントロールができずに生じる、勝利あるいは敗北時の感情の爆発、欠陥がある判決を下したと見られる外国人審判員に対する死の脅迫（日本人によって）、フットボールの試合で見られるような騒々しい観客など、柔道は武道ではなくなったと主張する人は少なくない。また最近の青い柔道着の導入は、日本の伝統文化・思想に背く事件としてみられているが、実際のところ、「白という色は、日本で純粋を意味する」より説得力のある議論ができる日本人はほとんど見当たらない。

このようなことから分かるのは、日本は柔道の宗主国であるにもかかわらず、必要に応じて日本側の代表者たちは国際舞台上に説得力がある意見を発言することがほぼ不可能だということだ³¹。それは、政治的な勢力の欠如のせい、言語力不足か、また日本の伝統的な価値について、自分たちも理解していない部分が多いからかもしれない。嘉納治五郎のような国際的にも政治的にも鋭い日本人は今の武道界に少ないということや、国際大会において日本の選手たちが絶対的な存在でなくなったことによって、日本の立場・権力はますます弱っていく一方である。最近、日本の柔道界は基本に戻り、嘉納治五郎の思想を再考しようという試みで「柔道ルネッサンス」を起こしている。

武道の国際化によって「悪影響」を受けた日本の武道である柔道を例として、国際普及、特にオリンピック問題に関しては剣道界は非常に敏感であり、なるべく避けようとしている。しかし、忘れてはならないのは、伝統武道といっても、現代剣道はさほど古いものではない。2・3世紀ほどさかのぼると、竹刀と防具という「考えられない」物の導入の際、激しい討論が続いていた。すなわち、刀・木刀の代わりに竹刀と防具を使い、打ち込み稽古をすることは、真の剣術を無意味の叩き合いに改悪してしまうという恐れがあった。いわゆる伝統文化の進化は必ずしも悪いことではない。古い要素を大事にし、保つべきものはたくさんあるが、それをただ単に過去をなつかしむ「あの頃は良かった」というような

³¹ 大塚忠義『日本剣道の歴史』窓社 1995年 pp. 195-243

郷愁の気持ちで、下剤の形を非難することこそ、無意味だと思う。このような問題に直面することによって、剣道は一体何のために修練されるのかを再考する重要なきっかけができる。

剣道の矛盾

剣道の国際化・オリンピック提案などによって、ひとつの岐路たたさされているのではないだろうか。これから、剣道はどの道を選んで行ったらいいのだろうか？ 武道（武術）を日本国内で体系的に普及するために、1895年に武徳会が形成された。実は、主に西久保弘道の多大な努力によって、人格形成的な要素を強調するために、1918年に「武術」が「武道」に改称された³²。

幕末期以降、武術のあらゆる要素が絶え間なく変化している。その当時の社会的ニーズに合わせるためにたびたび改造されている。武道が海外に輸出する前から、Hobsbawmが言う「伝統文化の発明」は、日本国内で絶えず追求されていたのである³³。すなわち、競技規定、段位制度、技の体系化、指導理念など、すべてが進化し、再考された。例えば、剣道の場合は、「竹刀の技」か「刀の技」という部分で、大塚忠義の言う「二重構造」による矛盾の解決に討論を費やしてきた³⁴。

要するに、武徳会が支持していた「武徳」という価値観は、生死超越に到達するため、剣道で使う竹刀は竹の棒ではなく、真剣として考えることを強調していた。また、こうすることによって、古き時代の武士とそのエトスである「武士道」の精神をしっかりと見につけさせようとした。よって、試合の勝利の際、喜ぶ感情を見せることや、刀を持って成し遂げることにはありえない派手な竹刀操作などすることは、非常識な考えだった。事実上、真剣を使っているように真剣にやることは、その当時の理想的な人間像を養うことに必要とされていた。

このために、武徳会が行った試合は採点形式で、撃突、姿勢、氣勢、態度など、刀の理に^{かな}適っているとみなされた試合者は高く評価された。この制度は8年間利用され、1927年に武徳会は統一した有効打突の基準を成立した。「撃突は充実した氣勢と刃筋の正しい技及び適法なる姿勢ももってなしたるを有効打突とする。」³⁵

多くの高名な剣道専門家の反対にもかかわらず、1929年に第一回天覧試合が開催された。この天覧試合は、日本の「一番強い」剣士を決める大会として京都の武徳殿で行われた。天皇陛下の前で試合をすることは、大変名誉なことではあったが、剣道は滅びるだろうと批判の声もあった。この大会から初めて5分の時間制限を導入し、先に一本を獲得した試合者は時間になるまで逃げ回って、打たれないようにという非剣道的な行動に走った者もいた。好ましくない傾向であったが、この大会はそれ以降戦前期まで学生・民間の大会を促進する誘因となった。

戦時中の剣道は現実性を要求した。てこの力で打つのではなく、実際の斬る動作を^{えとく}会得するように竹刀の長さや柄の長さは刀と同じ寸法になるように短くした。用語も「打つ」ではなく「斬る」「突く」に変わり、すべての試合は真剣勝負と同じように「一本」を先にとった者を勝者とした。

有効な一本は次のように再び定義された。

³² 坂上泰博 「剣道の近代化とその底流—三本勝負を中心に」 スポーツ文化論シリーズ 9 号中村敏雄（編）『日本文化の独自性』創文企画 1998年 p. 178

³³ Eric Hobsbawm と Terence Ranger 『The Invention of Tradition』 Cambridge University Press, 1983 を参照のこと。

³⁴ 大塚忠義『日本剣道の思想』窓社 1995年 p. 144

³⁵ 同上 p. 143

「試合は攻撃を主眼とし、斬突を確実にし実戦的気迫を持って行う、特に姿勢態度に留意すべし。」³⁶

終戦後のGHQによる数年間の武道禁止令が解放してから、剣道は再び学校教育に導入された。民主主義社会に適する教育的な近代スポーツとして復活できるように根本的な変更があったが、有効打突の基準は戦前とほとんど変わらなかった。今でもその定義は、比較的变化なく、抽象的である。

抽象的でありながら、世界中の多くの剣道家にとって、修行面においてなかなか達成できない完璧な一本を打つプロセスは、ある意味、ロマンを追い求める行為である。だが、客観的に見れば有効打突の判定は非常に難しく、決して統一しているとは言えないし、曖昧である。大塚忠義氏が『日本剣道の思想』の中で指摘したことであるが、剣の理法の内容や有効打突は、いくら審判規則の改訂をしても、まだ曖昧である。また、当てっこ剣道の好ましくない状況を良くするために全日本剣道連盟が1975年に「剣道理念」を制定したが³⁷、竹刀と真剣ならびに技術の修練と人間の修練と人間の修養という二重構造によって仮想された虚構の「剣道理念」の規定こそが、見直されるべきものと厳しく指摘している人もいる。要するに、「刀を観念化する剣道」は「竹刀剣道」の可能性を妨害しているということである。ここで、氏の剣道論を詳しく分析するわけにいかないが、概要は「竹刀剣道の思想」という表現を使い、剣道の社会的性格、能力や知性の向上を可能とする教育的性格、有効打突の課題の持つ技術的正確性、感動の共有が持つ芸術的性格、という4つの価値観を見出して、現代社会にもっとも相応しい剣道のあり方の考察である。「刀を観念化する剣道」を批判することについて全面的に賛成できないが、試みとして非常に大切だと思う。

この論理に納得しなくても、確かに剣道の現状において、不明確な点が多い。例えば、大塚氏はこう指摘している。「現在の剣道には、稽古と試合と審査を貫く一貫性と合理性を持った普遍的な技術評価の基準が見えない。中略。ある時は試合の強さを評し、ある時は段位の高低や品位を持ち出し、場所が変われば稽古の気持ちを語るといったようになる。」³⁸

すなわち、「強い剣道」と「正しい剣道」に矛盾がある³⁹。一方、「強い剣道」は試合に勝つが、フェイントなどの「ズルイ技」「卑怯な技」に頼ることが多く、ルールを守るところかその一線を越えることが多い（反則）。他方、「正しい剣道」は、フェア・プレイの精神をもって、厳密にルールや礼儀を守り、技が正直で大きくてまっすぐ。試合では、このような剣道は負けるかもしれないが、美学的に喜びを与える。勝ち負けにこだわっているのではなく、精神修行・人格形成というあっぱれな目的を目指す気持ちを伝える。理想として正しくて強いのが望ましいといわれるが、現実には多くの剣道家は狭間^{はざま}にいる。

この傾向は日本だけではない。筆者の国際剣道経験から言うと、完全に「正しい剣道」を目指して稽古に励んでいる道場は多い。すべての打突が力強くて、まっすぐで大きい。こういう外国人剣士は、小技に打たれても気付かず、ブルドーザーのように突撃する。ほとんど試合経験はない。

それと対照的に試合中心の道場も存在する。国にもよるが現在のところ、このような道場は明らかに少数派であるが、最近少し増えつつある。それは、3年毎に行われている剣道の世界大会で試合技術の全体的なレベルアップで分かることである。しかしながら、以下の図は、一般的な外国人剣士の試合に対する態度を表している⁴⁰。

³⁶ 同上 p. 146

³⁷ 「剣道は剣の理法による人間形成の道である。」

³⁸ 同上 pp. 12-13

³⁹ 同上 p. 211

⁴⁰ Bennett, Robison, Op. Cit.

● 試合は、剣道にとっていかなる要素よりも大切である



「正しい剣道」を重んじる傾向は、主に日本の伝統文化として一所懸命海外で普及した数多くの日本人剣士の「伝道師」活動から来ていると考えている。彼らは、剣道の文化・精神面に重点を置き、剣道はだましあいではなく、正々堂々と命懸けの「捨て身技」を大きくかつまっすぐ打つことを指導してきた。しかし、外国で剣道が成長するにつれ、このような姿勢は変わってきているのである。その原因は3つあると思う。

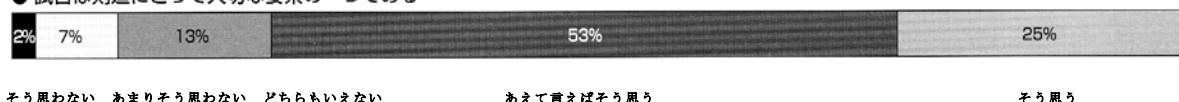
第1に、さっき述べたように、ほとんどの国では、剣道は少数スポーツとして考えられている。国内でより効果的な普及をしようとするれば、他の少数スポーツと張り合って、非常に限られた（国やスポーツ基金などからの）資金援助しか手に入はいらない。各スポーツ団体への資金配当は、国際試合における成績のよ^はい^しあ^しによる。また、GAISFに加盟することによって、資金援助がだいぶ得やすくなる。このことは後回しにすることなく、国際剣道連盟は検討する必要があると思う。

第2に、海外における韓国の剣道道場の増加に伴^{とも}な^な、日本の「伝道師剣道」より派手な技を使うので、韓国剣道は、多くの国で素人受けする新スタイルの剣道を提供している。また、試合を積極的に行っている。勿論、礼儀や人格形成や精神的な要素も重んじるが、韓国のコムドは日本のケンドウよりオープンに勝負の世界を重んじ、また、商業的な面でも、日本系剣道場よりもはるかに活動的である。もし、韓国のナショナルチームが世界大会で日本を破ったら、かなりコムドの世界普及に勢いはつくだろう。それは、遠い未来でない可能性は高い。

第3に、外国人剣士は、日本人に教えられている「正しい剣道」と実際日本でやっている「強い剣道」のはっきりとした矛盾に痛切に感じ始め、不満が高まってきている。日本の剣道の現状は、いくら「正しい剣道」の理想を強調しても、実際のところは勝利主義的であり、試合で勝つことが最大な目的にしている指導者・現役は多い。

例えば、中学校の試合で入れた「一本」はその試合者の生涯に大きな影響を与えることになりかねない。「正しい」という概念を意識していても、現代社会における多くのことと同じように、好成绩と工夫はその試合者自身、指導者、もしくはその施設のサバイバルに結びつく。「正しい剣道」の説得力と日本に対する信用が、この理想を強調している国でさえ試合で勝利を得るためにそれ以外の手段に頼ると、だいぶ薄れてしまうのである。しかし、これは日本剣道の実情である。このような対照的な理想をどう解決するかは、今こそ解決する必要がある。

● 試合は剣道にとって大切な要素の一つである



以上の図⁴¹で分かることは、外国人剣士も試合の重要さを認めている。しかし、日本国内外の多くの剣道家はこれを認めながら、試合で勝つことにこだわることは望ましくないと唱道している。そこが、剣道家にとってスポーツ界の頂点であるオリンピック参加の最も怖いところである。

このスポーツ的剣道と「正しい剣道」のジレンマの解決法として、2種類を普及すれば良いと主張する専門家もいる。ひとつは、真の剣の道を支持する刀を観念化する漢字で書く「剣

⁴¹ Bennett, Robison, 前掲書

道」。もうひとつはスポーツ的な面を促進する日本と西洋の思想を支持するローマ字で書く「KENDO」である⁴²。実際に、柔道とJUDOは同じように区別されている⁴³。しかし、多くの外国人剣士にとっては、偽善的で、見下されているような発言である。伝統対スポーツのジレンマをローマ字で解決する前に、まだ意見の一致をするために十分に討論されていない課題がたくさん残っている。例えば、

1. 現状の剣道は剣道家にとって満足できているか。(例えば、競技規定、有効打突の基準、昇段審査の基準など。)
2. 剣道は現代社会の人間のニーズを満たすほど進化してきたか。(例えば、剣道人口はなぜ減っているのか。今の日本の若者が直面している社会問題に何があるか。剣道はどのように役立てるか。)
3. 全日本剣道連盟が制定した「剣道理念」が約束してくれるように、実際に人格形成のためになっているのか。
4. そうでなければ、この目的が達成できるためにどういうことを改良したらいいのか。5. 時代遅れの伝統、儀式、考え方はあるか。あるとすれば、処分し「新しい伝統」をつくりべきか。
6. どうしても支持しなければならない要素(伝統的、文化的、精神的、肉体的)は何か。
7. 実際のところ、支持に成功しているか。

文化的な相違を考えると、これらが、自分の国で異文化である剣道を普及するために、外国人剣士がこれまでに自問自答してきた問題である。このように日本の剣道界は、海外での剣道普及から逆に得られるヒントが多い。

日本武道・剣道にとって、韓国の増加傾向にあるコムド人気、またそれを世界中に普及しようとして最近見られる韓国剣士の努力とWKAの結成などは、非常にタイムリーな出来事であるのではないかと思う。最近取り上げられている剣道の「オリンピック問題」という不安材料は、日本国内の剣道界に要求されていた自己反省するきっかけを与えたのではないかと思う。

武道の国際普及度は、日本の人間主義者と日本主義者の想像以上に成功した。だが、今は武道を通じて日本の価値観を押し付ける段階ではない。武道のいわゆる「伝道段階」は十分に普及の目的を果たしたと思う。確かに、海外には高段者は少なく、日本のように見本となる先生・先輩の「三世代」に渡る愛好者層はなく、よくても「二世代」までしかない。しかも、外国語で武道文化・思想をより深く理解でき、かつ、信頼できる文献や援助をしてくれる人はほとんど存在しない。このため、小さい連盟に大きな財政負担をかけるにもかかわらず、国際剣道連盟の高段者派遣団の効果・期待はかなり大きい。しかしながら、日本人でない武道高段者は増えつつある。彼らは、試行錯誤とある程度の混乱を乗り越えて、もともと日本の独自文化であった武道・剣道を自分の国に定着させて、受け入れられるようにした。

日本武道を異なる言語・価値体系などの違う国に移植すると、その文化的風土に合わせなければならないことは言うまでもない。そうしないと、熱帯林にサボテンを植えることや淡水魚を海水に逃がすと同じ運命になる。常識的に考えると、すべての国は異なる特徴を持ち、それぞれの社会のニーズは大いに違うだろう。よって、例えば、中東にある剣道クラブでは、日本文化的な要素は明らかに見えるに違いないが、その地域で栄えるために必要に応じていくつかの要素を変えるか再解釈しなければならないだろう。単純な例を挙げると、イランのような国では相手に対して座礼を行うことは考えられない行為である。それはアラーに対して最高の敬意を示す儀式である。必ず形に変更が必要である。しかし、この場合は相手に対する尊敬の念がないということない。

⁴² 村上太一、作道正夫「武道の国際化に関する一考察－剣道のオリンピック正式種目化展望する」『大阪武道学研究』第11巻第1号 p. 35

⁴³ 関根忍『全日本柔道連盟50年史1949年—1999年』全日本柔道連盟 p. 258

結論

結果として、日本が世界に普及した武道は、あらゆる異文化民族に青写真を与えたに過ぎない。その武道文化の青写真は、武道の真髄（人間の精神・肉体の練磨の道）をおおよそ保ちながらある程度進化し、成功した場合もあるし、失敗に終わった場合もある。一方この進化というのは、韓国コムドミたい微妙な変化もあり、他方、ほとんどルーツは日本にあったということが分からないほど、ハイブリッド武道に完全に变化するものもある。だが、武道が世界で圧倒的な人気があるという事実を見ると、どんな国・文化・時代の人間にも得ることができる普遍的な真髄があるに違いない。

つまり、剣道・武道は世界のどこにでも適応していきける。それは、ただ単に「日本の伝統文化」として定着しただけでなく、もっとスケールの大きいものに成長したと思う。しかし、その過程においてサバイバルのために、様々な要素を変えざるを得なかった。日本においても、その時代時代の理想になじませるために、武道の歴史的変換の例はいくらでもある。

日本は世界に剣道思想を紹介したことは言うまでもないが、韓国コムドの技術的高度化また、韓国からの普及運動・商業化とオリンピック化提案から、おそらく日本の剣道界は始めて剣道の国際普及の範囲とその幅広い影響と、これからとるべき方向性によりやく目を向け始めたのではないだろうか。本当は韓国に感謝すべきであると思う。

しかし、本当の現状を明らかにしてくれるデータがないがため、多くの剣道家に不安をもたらしている。武道・剣道の世界普及の成功は逆に日本のフランケンシュタインと云って良いだろうか。自分の造ったものに滅ぼされるのだろうか。この類似はドラマチック過ぎるかも知れないが、日本の剣道界のこれからの課題はけっして怪物を飼いならすことではないと思う。逆に日本国内において剣道の様々な問題点を、明治・大正・昭和時の各時代でやったように、剣道を徹底的に再考・再開拓するべきのではないかと思う。日本はずばらしい青写真を世界に与えた。現在、世界が必要としているのは、二重基準・矛盾のない剣道を促進する模範となるものである。その模範となるのはだれだろうか？